

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）： 小川 了



学位申請者： 山田重周

論文名： バサリ社会の仮面 — 仮面及びその語り口の変化に関する民族誌的研究

論文の要旨

西アフリカのセネガル共和国とギニア共和国国境地帯には、近隣民族及びフランス人研究者等から「バサリ」と呼ばれ、自称アリアン (alian/pl.) bulian) と称する人々が生活している。日本において、バサリ社会に関する報告はこれまでまとまったかたちで成されたことはない。

本論文はまず第1に、フィールドワークによって集められた一次資料を提示することで、西アフリカをフィールドとする人類学に新たな知見を付与することを目的としている。その具体的方法として仮面を記述の対象として選択し、仮面を中心に展開される営みに焦点をあてることによって、バサリ社会の生活の一端を描き出すことを目的とした民族誌である。

バサリ社会の仮面に関するまとまった論考は今までのところ発表されておらず、いくつかの先行研究の中に仮面に関する記述を見いだすのみである。それらにおいて、バサリ社会の仮面は一般に「超自然的な精霊」と記述されている。たとえば、Gessain は、1971年、バサリ社会の年齢階梯に関する論考を行うなかで、「女性にとって仮面とは、超人間的な能力を持つ超自然的な精霊 (esprit) である」と記述し、Ferry は、1977年、仮面の名前に関する報告を行うなかで、仮面は「女性と子どもに対しては、川や森の中からやってきた精霊 (esprit) であると言われている」と述べている。Girard は、バサリ社会の仮面は、「冥界の精霊 (génie) の明らかな表れ」(1984年) でありバサリのコスモロジーと不可分なものであると記している。また、Nolan は仮面を「仮面を付けた精霊 (a masked spirit)」(1986年) という語で翻訳している。最近では、2003年に出版された著作のなかで、Gessain が、仮面を「木の葉や繊維でできた衣装の下に隠された受肉した精霊 (esprit)」と記述している。

しかし、これらの記述はあまりにも一面的かつ静態的ではないであろうか。

確かに、バサリ社会の仮面は「精霊」とであると語られることがある。しかし、バサリ社会の仮面に関する語り口がこれ1つしか存在しないわけではない。また、バサリ社会の仮面は、アフリカの他の地域の仮面と同じ意味で「精霊」とも言い切れないであろう。とすれば、仮面がそうであると語られる「精霊」とはいかなるものであるのかが問われなければならないのではないだろうか。

さらに、先行研究が明らかにしてきたように、アフリカの仮面は決して固定的なものではなく、歴史的に変化してきたものであるならば、仮面に関する語り口も同様に、コスモ

ロジーに関わる固定的かつ静態的なものとしてではなく、歴史的に産出されてきたものとして捉えることができるのではないであろうか。このような問題意識を出発点として、本論では、バサリ社会の仮面及び仮面に関する語り口をバサリ社会と外部社会との関係の変化という枠組みの中に位置づけることで考察している。

以下、章を追って概要を見ていく。

第1章では、ある特定の社会を、閉じた空間として静態的に把握するのではなく、外部との関係を検討することで歴史的に描出することを目指してきた先行研究及びバサリ社会に関する先行研究を概観している。そこにおいて、1) ウォーラーステインの「世界システム理論」に影響を受けた外部論理の重要性を強調する研究、2) 1) のような研究が、「世界システム」に取り込まれる諸社会を受動的に描き出しすぎているとの批判のもと、「世界システム」を受容する社会の内部論理を強調する研究、3) 内部か外部かという問題構成をとるのではなく、内部と外部の絡み合い自体に焦点をあてる研究の3タイプに整理している。

続いて、山田氏はこれらの先行研究が

1) バサリ社会の仮面像を捉えるためには一面的なものでしかなく

2) 仮面に関する言説は、ある特定社会のコスモロジーに関わる固定的かつ静態的なものではなく、ある特定のコミュニケーションによって産出される歴史的なものであると解釈しうること

3) そして、バサリ社会の仮面の変化は、先行研究で問題とされてきた位相とは異なる位相で起きていること、ひいては、内部論理の重要性を指摘するサーリンズ、オートナー等の変化に関する理論とは異なる形の変化がありうること

を具体的な事例と共に提示することが出来るのではないかと見通している。

第2章では本論の議論の背景となるバサリ社会の民族誌的資料を提示している。バサリの人口・生態環境、民族名、使用言語、地理学的環境、社会構造、生業などの項目を立て、バサリの民族誌的資料を概論的に提示した。

第3章では、先行研究を参照しながら、バサリの居住する地域をその一部に含むセネガンビア南部地域の歴史を概観した後、バサリ社会の歴史を再構成し、現在、孤立している、あるいは「孤立している」と語られているバサリ社会は、もともとから孤立していたわけではなく、ひとびとの交流・接触の結果、現在見られるような「孤立」したかたちで存在することになったのではないかと結論している。

第4章では、バサリ社会の出自集団と年齢階梯に関する民族誌的資料を提示し、これら2つの制度がそれぞれどのようにひとびとを結び付けているのか、またこれら2つの制度が変化する中でひとびとの結びつきがどのように変化しているのかを考察し、現在バサリ社会では、ひとびとを差異化し、その差異に沿うかたちで様々な役割を割り振る年齢階梯・「クラン」などによる人間関係が重要なものではなく、差異が強調されることのない均質的な人間関係による結びつきが重要なものになってきていることを指摘している。

第5章では、オルクタ、オディニール、オガンゴラン、ビイチャと呼ばれる四つの仮面とフランス語話者によって「あまのじゃく」と呼ばれるアホレの特徴を記述し、バサリ社会における仮面とアホレの役割を考察している。1) 仮面がフランス語話者に「masque」と総称されるのに対し、アホレは「masque」と呼ばれることはない、2) 前者と後者では所属する名詞クラスが異なる等、仮面とアホレは言語的には異なるものとして分類されて

いるが、両者はバサリ社会の中で同様な役割を担っていることを確認し、両者の役割として、

- 1) 仮面は、祭りや農作業の際に、うたい踊ることで、ひとびとを楽しませる役割を担っていること
- 2) 仮面は規則の布告・実行・維持にかかわる役割を付与されていること
- 3) 仮面及びアホレは年齢階梯制度と密接に結びついていること
- 4) 仮面とアホレは、普段とは異なる人間関係を生み出し、人間関係を多重化する機能を持っていること

の4点を指摘している。

第6章では、男が仮面を身につけることを可能とするための手続きの中で、男と仮面、男とアホレの関係がどのようなものとして語られているのかを検討している。

少年が大人になるための手続きの一環として行われる祭りの2日目、エクブと呼ばれる場所でカメレオンの肉片の入った飲みものを飲み、これによって以降仮面やアホレになることが可能となる。この状態は、「わたしはアホレと共にいる *g axore eme*」、「あなたたちはアホレと共にいる *g axore ii kun*」または「おまえはアホレを獲得した *ka syoto kujyo axore*」などと表現される。これらの表現は、全てアホレに関わるものであるが、オルクタやオディニールなどの仮面に関しても同じことだと説明される。また、この「共にいる」あるいは「獲得した」アホレや仮面になることは、大人になるための手続きの一過程として、普段とは異なることばで話し、普段とは異なる振る舞いをするを義務付けられている少年（「オガトレへ」と呼ばれている）と同じく、「民族」「クラン」などと翻訳することの出来る「ヌング」という語を使用することで、「異なるヌングになる」、「同じヌングではなくなる」などの表現で言いられている。さらに、オルクタ、オディニールなどの仮面とアホレは、オガトレへと同じく「カメンレオンを飲んだもの」という名称で一括されている。これらの事実から、バサリ社会の仮面は、アホレやオガトレへと連続したものとして把握されていることが確認できる。

第7章では、仮面とアホレの差異を強調する2つの語り口を記述している。

仮面は「ビール」（フランス語話者はこの「ビール」という語を「*génie* 精霊」と訳している）と呼ばれることで、アホレとは異なるものとして整理される。また、実際になされている言語行為をみればアホレやオガトレへの名前に纏わる慣行と連続したものであるのにもかかわらず、「誰々が仮面衣装を身につけている」、「仮面衣装を身につけているのはじつは村の男である」という周知の事実が、秘匿すべき「内容」を伴った「秘密」であると語られることで、仮面とアホレの差異が強調されることになる。

第8章では、なぜ現在このような語り口が多く見られるのかを、仮面に関する語り口とバサリ社会と外部社会の変化に伴うフランス語によるコミュニケーションの増大との関連を検討することで考察している。

バサリ社会と外部社会の関係が変化する中で、バサリ社会においてフランス語を話すことのできる人の数が増えていく。また外部からやってくるものとコミュニケーションをとる必要からフランス語が重要なものとなっていく。その中でひとびとが仮面についてフランス語で語る状況が生じてくる。すると、フランス語で語られることによってバサリ社会の仮面はこれまでとは異なった形で問題とされるようになる。フランス語での問いかけに

対し、バサリのフランス語話者はそれまで問題とされなかった形で仮面を語り直すことになるのである。つまり、仮面を「森の精霊」と語る語り口は、決してバサリ社会のコスモロジーに関する固定的かつ静態的な言明などではなく、バサリ社会と外部社会の関係が変化し、フランス語でのコミュニケーションが重要なものになってくる中で強調されるようになった「歴史的」な語り口であると解釈することができるのである。

換言すれば、仮面をアホレとは異なるものとして把握する語り口や、仮面を「森の精霊」と語る語り口は、Girard が言うような、バサリ社会のコスモロジーに関わる固定的かつ静態的な語り口などではなく、社会状況の変化に伴うある特定のコミュニケーションの中で語り直された結果生じた歴史的な産物であると考えられることを指摘している。

最後に第9章、結語として、1) 当該社会を閉じた空間としてではなく外部との関係のもとに、2) 静態的ではなく歴史的に、3) 内部と外部を対置させた上でどちらかの論理を強調するのではなく、両者が錯綜する中で起きている変化を記述することの重要性を指摘し、このような手続きによってこそ初めてアフリカの様々な地域でその存在が報告されている「仮面」や「精霊」をより包括的に検討することができる結論づけている。

この結語は本論文が成果として達成し得たもの、あるいは到達し得た点と言い換えてもよからう。

本論文の評価

本論文は山田氏があしかけ8年をかけて完成させた労作である。山田氏のフィールドワークはバサリ社会でなされたが、バサリ人はセネガルでももともと内陸部、アクセスが容易ではない地域に暮らす少数民族であり、セネガル政府公報が観光客向けに発する情報においても「国内でももともと到達することが難しい村々で生活している」と紹介されているほどである。山田氏はそのバサリ社会に数度の長期滞在をし、マラリアを発症したこともあるが、まず言語の習得から始め、バサリ社会にとけ込む努力をし、バサリの「一員」として認められるためのイニシエーションまで受けている。秘儀的な領域にあると言える仮面についての調査が可能になったのは山田氏がこれほどまでにバサリ社会に受け入れられたからこそである点については全審査委員が高い評価をした。

山田氏の論文は仮面に関しての「語り口」、つまり人々の言説に焦点を当てるものであり、その意味で人々の頭の中にあるものの解明に主力が注がれている。しかし、他方においてバサリ人が暮らす自然地理的・社会的環境の記述はもとより、バサリ社会の構造、生業の様式、季節移民のあり方、出自集団、年齢階梯の構造と機能、バサリの歴史にも触れており、たとえばバサリの歴史についてはなぜ彼らが「孤立」に至ったのかについて独自の見解を述べる域にまで達している。

本論文の主題である仮面について、先行研究での仮面に関する記述の不十分さ、不適切さを指摘した上で、「固定的」「静態的」ではない歴史的な変化を見据えた上で山田氏としての独自の見解を表明し、それを説得的に記述したことを審査委員全員が認めた。

公開審査の概要

本博士論文の公開審査は2008年1月25日におこなわれた。審査委員には仮面研究の領域で世界的に第一人者である国立民族学博物館の吉田憲司氏、また論文中、バサリ語での

記述が相当量なされていることもありアフリカの少数民族の言語に明るい京都大学教授梶茂樹氏にも加わっていただいた。審査の冒頭で山田重周氏による論文の概要説明があり、その後、審査委員との間での質疑応答に入った。以下にその概要を記しておく。

本論文の評価の項でも記したとおり、山田氏によるこの研究は、まず日本人研究者によるまとまったバサリ社会研究として初めてのものであり、言語の習得という段階から始めて秘儀的な領域のものである仮面研究にまで至ったことに対して賛辞が贈られた。西アフリカの人類学、セネガル研究、そしてバサリという少数民族社会の研究に新しい一面をもたらすものであることは間違いない。

次に、仮面が何かそれ以外のものを「あらわす」ものであるという前提を抱きつつ、仮面が実際に生きている社会に入ったときの研究者のとまどい、仮面にまつわる秘密の融通無碍なあり方、外界との接触に起因する木製仮面の増加など、仮面を有する社会で多くの場合に研究者が会おう経験や知見を対象化し、インタビューを通じて丹念に人々の語りを集めることで、そのよってきたるところを明らかにしようという真摯な姿勢は、まずもって高く評価できる。また、その作業の上で、仮面についての認識が固定的で透明な語りではなく、歴史的な形成物であるという主張も、それ自体としては十分に首肯できるものである。仮面が「精霊」であるという語りフランス語の使用の中で成立してきたものではないかという指摘は、その成立過程を歴史的に再構成したとまでは言えないものの、仮面に関わる他の研究にも警鐘を鳴らすものとして注目される点である。

他方において、考察が不十分と思われる点、批判されるべき点、今後の発展が望まれる点にも当然ながら言及された。

まず、あまりにもインタビューをもとにした「語り」に重点を置いたため、仮面を仮面たらしめている当のもの、つまり仮面とそれを巡る行為（実践）と、それがバサリの人々に何をもたらすのかについての考察が充分になされていない点が惜しまれることが指摘された。仮面は語られるためにあるのではない。それは舞踊や、格闘など、行為と一体になったものとして存在する。そうした行為の具体相への目配りを欠いているために、本論文は仮面についての語りの研究ではあっても、仮面の研究としては未だ道半ばにあると言わざるを得ない面がある。ただし、本論文のタイトル自体が「仮面、及びその語り口」の研究と明言していることを鑑みれば、この点をあまり厳しく批判しうるものでもないかもしれない。

バサリ語での会話の中で女性や子供たちに対してのみ仮面が「森の中の生き物」だといわれ、仮面が「精霊」であるという語りフランス語の使用の中で成立してきたものであるとしても、そのことがそのまま仮面が人間の目に見えぬ力と関わって存在すること（山田氏の言によれば憑依の問題と関連づけること）を否定するものではない。たとえば何故仮面の活動が森と村の厳格な区別のもとにおこなわれるのか。イニシエーションの最も重要な場で、少年達がなぜカメレオンの肉を食し、以前に他人のエンジュン（魂）を食べたことがあるとされる者はそれを控えるのか。儀礼の期間中、参加者に何故様々な禁忌が課されるのか。これらの諸慣行について山田氏の考察が及んでいるとは言えない。

儀礼に用いられる特定の植物や動物に関しても、その背後にはバサリの動物・植物分類のあり方が関与しているはずである。また、仮面の分類と、その舞踊の差異など、仮面研究に要求される作業の多くが等閑視されている観がある。それらの作業がなされたならば、

本論文が中心的に進めてきた語りの分析も、また別の角度から位置づけ直すことが可能になったであろう。本論文の中にはさまざまな事象の断片がすでに記載されているだけに、それについての踏み込んだ考察がなされなかったのは、やはり惜しまれる点である。

上記は、本論文の中心的な問題についての忌憚のない批判であるが、同時にバサリというほとんど知られていない言語に挑み、悪戦苦闘しつつも人々の「語り」を主テーマに選んだ勇氣については再度の讃辞が与えられてしかるべきであることが指摘され、農事暦といったバサリ人の基本的な生活のあり方にも注意が向けられている点も評価された。

山田氏が「外部」と「内部」とを区別するのではなく、両者の錯綜する関係から内部のあり方、変化を描くという主張は本論文の一つの柱になっているのだが、すでにそこに外部と内部が前提されているという落とし穴がある可能性について注意すべきことも指摘された。

さらには、固定的、静態的な解釈への批判がなされているが、この点はすでに人類学では存分に言われていることでもあり、そこに革新性を求めるものではないという厳しい指摘もなされた。山田氏の今後の新展開が期待される点である。

「アホレ」という仮面ならぬものでありながら、仮面といくつもの共通性をもつものについて、むしろこれこそがバサリ独特のものであり、アホレの「道化」性、「トリックスター」性といった観点からバサリ社会全体の分析の可能性も示唆された。

上記のような指摘、批判に対して山田氏からは真摯な反省点、回答、新しく考察すべき点が述べられ、今後の研究に活かしていきたい旨の発言があった。実のところ、上記の通りのコメント、批判等は本論文をさらに発展させるためのものであって、本論文の価値を低下させるものではないことについては審査委員全員の一致が表明された。

論文審査、及び最終試験の結果

本論文は山田氏自身が新しく開拓したともいえるバサリ社会の重要な一面について、長いフィールドワークで得られた一次資料にもとづき、精緻な論理のつながりを厳密に追い、初めてバサリ社会について読む人にも理解しうるようにという姿勢で書かれたものである。西アフリカの人類学的理解にはむろんのこと、広く仮面研究にも貢献するものである。上記の点からして、山田氏独自の学問的貢献をしたものとして高く評価しうるものであり、将来的な発展も期待できるとの観点から総合的に判断して、審査委員会は全員一致で、本論文が博士（学術）の学位を授与するに値するものであるとの結論に達した。